

2021年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

「郷育」と「響育」で育む「科学する心」



大和郡山市立 郡山西幼稚園

目 次

I	地域の中の郡山西幼稚園	
II	「郷育」と「響育」で育む	・・・1
III	「郷育と響育」と「科学する心」	・・・2
IV	実践事例	
1	葉っぱっておもしろい！葉っぱと向き合う中で （5歳児）（令和2年6月～11月）	・・・4
2	コロナ禍 ふるさと 郡山城跡に触れて （5歳児）（令和3年5月～6月）	・・・8
3	すみれ探検隊とふるさとの自然 （5歳児）（令和3年4月～7月）	・・・12
①	『すみれ探検図鑑』	・・・12
②	チョウと出会い、響き合う	・・・14
V	つながり 響き合う ドキュメンテーション	・・・18
VI	研究を振り返って	・・・19

I 地域の中の郡山西幼稚園

本園は、大和郡山城跡を囲む城下町、旧郡山市から少し離れたところに位置し、自然豊かな矢田丘陵と広々とした田園に囲まれている。

2480㎡もある園庭には大きく育ったたくさんの木々が四季折々を彩り、様々な鳥・虫などの生き物を呼び寄せている。自然との触れ合いは子どもたちの日常である。自然は子どもたちの生活の一部として溶け込んでおり、子どもの遊びの原点となっている。

また、郡山城跡周辺は、子どもたちにとり身近であり、園外保育として、機会があるごとに出かける場となっている。保護者は教育熱心な方が多く、“とうさん広場”や“さくらママ”などの、保護者ボランティア活動も活発である。

地域には、幼稚園のことを気にかけてくださり、カメやスズムシ、菊の花など幼稚園に持って来てくださる方もおられる。

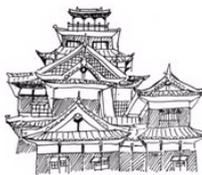
地域に根差し、園内外で、子どもたちは、日々経験を豊かにし、様々ヒト・モノ・コトに出会い、触れ合いながら生活している。



II 「郷育」と「響育」で育む

金魚の町として知られ、十万石の城下町の街並みが残る我が大和郡山市。藍染の足跡が残る紺屋町、大工町、塩町、魚町、茶町、鍛冶町、雑穀町、城内町など歴史を感じる町名と街並みが残っている。そんな大和郡山市では、「郷育」と「響育」を大切に掲げ、市の教育として取り組んでいる。

基本理念



ふるさと郡山に夢と誇りと自信を持ち

未来を拓き 未来に駆ける

心豊かな 人づくり



「郷育」 ふるさとの歴史に学び 「人」を育てるまちづくり

「響育」 心と心が響き合う 共に育ち希望がふくらむまちづくり

基本方針

「郷育」

- ふるさとで育ち
学校や地域への愛着と誇りを育てる
- ふるさに学び
一人ひとりの学びをきめ細かく応援する
- ふるさを創る
ふるさとの未来を担う子どもを育てる

「響育」

- 心に響く
子どもの感動体験を大切にする
- みんなで響く
力を合わせ共に感じる仲間をつくる
- ずっと響く
生涯を通じて学ぶ喜びを持ち続ける

この理念そして方針は、まさに科学する心となるものである。子どもたちにとって大切なふるさととなるこの地、この園で、心に響く豊かな体験を友達や身近な人と共にし、学ぶ喜びを味わい続けながら、この地、この園に誇りをもち未来を担って欲しいと考えている。

Ⅲ 「郷育と響育」と「科学する心」

「出生とともに（あるいは出生以前から）乳児は文化的社会的文脈の中に置かれています」と岡本夏木は著書『幼児期—子どもは世界をどうつかむか—』＜岩波新書 2005, P31＞で述べている。郡山西幼稚園では、幼い子ども時代を、この恵まれたふるさとの文化的社会的営みの中で学び、様々なヒト・モノ・コトに出会い、響き合い、生涯にわたる心の土台を育んでいきたいと日々取り組んでいる。

「郷育」「響育」の中には、幼児期に大切にしたい学びの芽がちりばめられている。人生の基盤となるかけがえのない幼児期に、生涯にわたる学びの源を、ふるさと郡山西幼稚園で大切に育てていきたいと考えている。ふるさとのよさ、自然、文化に触れ、地域の中、幼稚園生活を通してヒト・モノ・コトに出会い、わくわくと心を動かし響き合いながら子どもたちが学んでいく中で、科学する心は育まれると考える。

「ふるさと」は、

- ・心の基盤となるもの
- ・自分の中の誇りとなるもの
- ・先人の積み上げてきた文化が存在する
- ・人と人とのつながりがある
- ・その地ならではの自然がある
- ・その地ならではの町がある

などがあげられる。地域での営みがふるさととなる。

「ふるさとで学ぶ」「ふるさとのよさを感じる」「ふるさとで人や自然と出会う」など、子どもたちが過ごす地域はふるさととなり、すべての基盤となっている。

「響く」は、

- ・何かに出会い、主体的に関わる中で、自分の気持ちが動く、自分の心に響く
- ・友達と響き合う
- ・異年齢児に響くが広がる
- ・先生に響く
- ・保護者に響く
- ・子どもをとりまく様々な人たちに響く
- ・すべてが互いに響き合う

などがあげられる。

心が動くとおもしろいな」「やってみよう」「よく知りたい」「どうなっているんだろう」と響きが生まれる。子どもが心を響かせヒト・モノ・コトに向き合う中で、「大切にしたい」「もっと分かってほしい」などの思いが膨らんでいく。「響く」「響き合い」の連鎖・連動・往還が広がっていく。

ふるさにおいて、このような響きの連鎖・連動・往還が生まれる中で、子どもの学びである「科学する心」が育まれると考える。

「科学する心」は、ふるさにおいてすべてが響き合う中で育まれる。

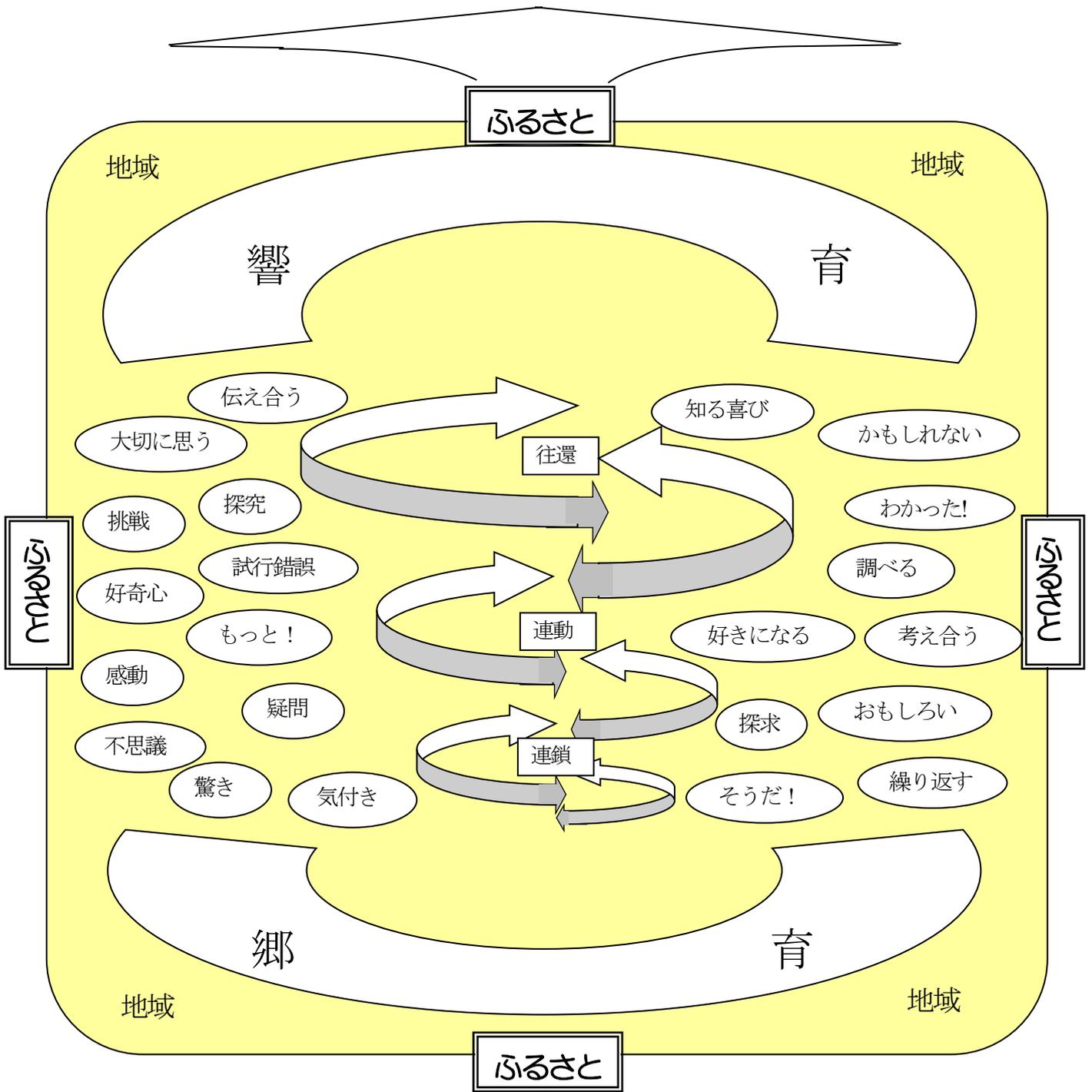
響き合いは、子どもを取り巻くすべての環境の中で生まれる。地域・文化・自然・身近な人や物、出来事（ヒト・モノ・コト）などそれがどんなことであっても、そこに子どもの心があり、「不思議だな」「おもしろいな」「どうなっているんだろう」、と思いをもち、自分で考えて試してみたり、分かる喜びを味わったりと気持ちを動かし感じている時、科学する心は育まれている。

ふるさととなる地域に触れ、地域のヒト・モノ・コトを生活や遊びに取り入れ、わくわくしたりおもしろさを膨らませたりしていく過程が、科学する心を育むと考える。

そして、自分の育ったふるさとが好きになり、ここを大切にしたい、ここが誇りだと思えるよう、幼児期を大切に育んでいきたいと思う。

子どもが育つふるさとでの、遊びにちりばめられている、科学する心を見つめたい。

科学する心 (探究する・学ぶ)



科学する心 (心が動く・発見・気付き)

どんな遊びの中にも、子どもが心を動かし、向き合っていれば、そこに科学する心はある。
 きらっと光るものを保育者が目にとめ、
 子どもの思いに心動かし寄り添うことが求められる。

IV 実践事例

子どもたちのふるさと郡山西幼稚園の中で、子どもたちは、周りの様々な環境に関わり、響き合いながら遊びや生活を創り出している。一方、コロナ禍で新しい生活様式を行っていく中、大切な幼児期をどのように過ごしていくのか、模索しながら取り組んでいる。

令和2年4月、例年のない生活が始まった。幼稚園は休園となり、家庭での生活を強いられる。6月を迎える頃ようやく時差登園、そして、新しいクラスで新しい生活が始まった。

外の世界に出た子どもたちを待っていたのは、幼稚園の自然だった。家庭に閉じこもっていた子どもたちは園庭で草花を摘んだり、虫探しをしたりして、自然に触れて遊ぶことを楽しみだした。

1 葉っぱっておもしろい！葉っぱとの出会いから葉っぱ探検隊へ（5歳児）

（令和2年6月～11月）

6月15日（月）クローバーで色が出た！

子どもたちは、毎日草花を摘んで花束にしたり、カップに集めたり、ままごとのご馳走にしたりして遊んでいる。この自然と関わる姿を大切にしたいと思い、擦り鉢や擦り棒など、さりげなく中庭に置いておいた。するとA児B児C児はじめ、子どもたちはそれを使って見つけたクローバーを擦りつぶし始めた。水を足して色水を作る中、K児が「そうだ！もっと濃い色作ろう」と言い出し、B児C児にも響く。目標ができる。

濃い色を作るには？

「クローバーいっぱい集めたらいいねん」と3人で集め色水を作る中、B児が「強くすらないと濃い色でないなあ。」と気付く。すると、C児「じゃあ、私（擦り鉢）持っとくわ」B児「じゃあ、私擦るわ」A児「私葉っぱたくさん集めてくる」と3人で濃い色目指して協力しだす。「ずっと擦ってたら濃くなっていく！」と夢中。B児の“強く擦りつぶす”という気付きが2人に響き、協力するという響き合いが生まれた。薄い色・中間の色・濃い色の3色の色水ができる。保育者が廊下に並べて飾るととても嬉しそうだった。



クローバーに夢中

その後も、クローバーの色水作りに夢中になり、楽しんでいく。

B児が茎を取って葉っぱだけを擦りつぶしてみる。B児「見て、茎とって葉っぱだけちぎって入れたらすごく濃くなった」「本当や、やってみよう」とB児の発見にみんなも茎をとり、葉をちぎりだす。

発見！ 茎が混じっていると色が出にくい。葉っぱだけだと擦りやすく色が出やすい と気付く。



濃さの順に並べる

①「ほんとだ、いいこと発見したね。すごいやん」と保育者も響く。

B児たちは、薄い色水から濃い色水へ、濃さを比べながら並べていく。一人のモノとの対話の中で生まれた心の響き（発見・気付き）が友達に響きだす。この気付きが広がればと、子どもと共に濃さの順に並べて飾る。（響きを生み出す環境の構成）

いろいろな葉っぱでやってみよう！

濃い色の順に並べられた色水が子どもたちの目に留まり、響く。子どもたちは色水作りの虜となる。

始めは、クローバーでの色水作りに熱中していた子どもたちも、周りにあるいろいろな葉っぱに目を向け、試しだす。葉っぱや濃さによってにおいが違うことにも気付いていく。心に響く体験が広がっていく。

どの葉っぱがいいのかな



この葉っぱ使う？濃い色ができるよ。

6月19日（金）不思議な葉っぱとの出会い

雨が降り、いつものように葉っぱを見つけて色水が作れない。けれどもA児は、「色水したいねん」というので、廊下で色水が作れる場所を一緒に構成する。A児「葉っぱどうしよう」①「そうやね…」と一緒に考える。いつもの中庭と反対側の園庭側に体を伸ばすと取ることができる葉っぱ（つるがどンドン伸び、あつという間に物に絡みついでいく葉っぱ）があったため、使うことにする。

トロトロしてる！

黙々とその葉っぱを擦りつぶすA児。その思いが保育者に響き、保育者も「どんな色水ができるだろうね」と一緒に始める。しばらくするとA児「すごい、なんかネバネバになってきた」①「ほんとだ」擦ったネバネバの色水を茶こしでこそうと上から垂らすとA児「見て！上からこうやってしたらトロ～ってなる！」①「おもしろい。大発見だね！」①「先生のもトロ～ってなってきた！すごい！」A児「もっとしたい！もっと取ってくる！」と葉っぱを取りに行き、丁寧に葉っぱを集め、夢中になって繰り返す、たくさんのトロトロの色水を作った。きれいなトロトロの色水を作ろうと必ず茶こしでこし、大きなペットボトルをトロトロの色水でいっぱいにしていく。



遊んだ後、A児の発見をみんなに伝える時間をとり、子どもたち同士が発見やおもしろさを共有できるようにした。

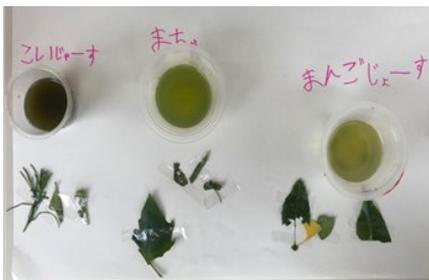
「おもしろい葉っぱやなあ」「なんていう葉っぱかな」と疑問があがり、図鑑で調べてみるが、なかなか分かりづらい。このことに響いた園長先生が、「先生も何か知りたいな」とパソコンで必死に協力。そして“ヤブガラシ”ということが分かる。

その後、「ぼくもやってみたい」と友達に響いていき、たくさんの子が“ヤブガラシ”の色水作りをする。①「モロヘイヤみたい」「うん、トロトロや」と嬉しそう。自分から作り方を聞けずに困っていたE児に気づき、A児が作り方を教えると、「そうか、そうやってやるんだ」とE児にも響く。A児は、さらにドロドロのものを作ろうとする。水の量を極力減らし、茶こしでこせる程度に調節しようと試行錯誤する。

6月25日（木）響き広がる好奇心

“ヤブガラシ”との出会いをきっかけに、いろいろな葉っぱに興味をもち、園庭や中庭で探す子が増える。

たくさんの種類を集めてきたD児は、「これ使ったらどんな色になるかな」「これはどうかな」と種類ごとに試していく。葉っぱによって少しずつ色が違うことを発見する。その姿に響いたA児はD児に声をかけ、D児が集めてきた葉っぱと一緒に試していく。それぞれの葉っぱを試すと、D児「この葉っぱとこの葉っぱ混ぜたらどんな色になるかな」A児「やってみよう」と今度は組み合わせてどんな色になるか試す。「こんな色になった！」と嬉しそうなA児とD児。①「混ぜて作ったの？おもしろい！初めて見る色！」と保育者にも響く。組み合わせによって本当に違って、微かな色の違いを感じている子どもの目はすごい。A児とD児は相談して、色水に名前をつけ飾りだした。



見つけた葉っぱ、色水を作った葉っぱを画用紙に貼る。形や色、葉脈の模様等に興味をもちだす。

飾った色水が溜まったり色が変わったりするので、子どもに問いかけたところ「残しておきたい」という思いが強い。「でもいっぱいになっちゃうしな」「前に作ったのは片付けよう」という声もあがる。一生懸命作った色水は大切に、捨てたくないという思いを受け止めたいと思い、写真に撮って貼り出す。その写真を見ると「これ、私が作ったやつ」「今日も作る」と嬉しそうに見ていた。

6月25日（木）葉っぱ探検隊

「幼稚園には他にどんな葉っぱがあるかな?」「みんなで探しに行ってみようよ」とクラスみんなで葉っぱ探検に出かける。「この葉っぱおもしろい形」「これフワフワしてる。触ってみて」「ギザギザのものもあるよ」「ハートの形してる」など、形や感触などを楽しんでいる。この日だけでも30種類ほどの葉っぱを見つけ、「ツルツル」「シュワシュワ」「シャカシャカ」「ザクザク」など自分の言葉で表し、形、色、模様、感触等の違いに気付き、友達や保育者と伝え合った。「これで色水作りたい」「どんな色ができるかな」と期待に胸を膨らませ、次の日、集めた葉っぱで色水を作っていた。



採ってきた葉っぱを分類。「MちゃんのこれとNちゃんのは一緒」と同じ種類に分けて入れていく。

なんていう葉っぱかな?

見つけた葉っぱの名前を調べるが、種類が多くて名前を見つけるのは難しい。調べるのが好きなF児は、友達が「これは何だろう?」と調べていると「どれ?」「調べようか?」と現れて一緒に調べだす。この日もB児たちが行き詰っているとF児がやってきて「これかな?」「似てるけどちょっと違うな」などと照らし合わせている。葉っぱの図鑑との照合は難しいが子どもは夢中。



どれかなあ?

7月9日（木）葉っぱの中にお花?!

A児は葉っぱをじっと見つめていた。「見て、お花の形がある」という。「葉っぱの中にお花があるねん」というので、保育者が「お花?」と見ると、葉脈の模様がお花のようになっていた。「ほんとは!お花がある!」と保育者も心に響く。葉脈の形を「お花がある」と捉えたA児の感性にも心動かされる。心動かされた保育者は、葉脈の模様を楽しめるのではと、葉っぱのスタンプができるよう絵の具を用意する。



A児の発見は友達に響き、他の子どもたちは葉脈にも関心を持ちだす。スタンプを楽しむ子どもたち。1枚1枚丁寧に扱いながらスタンプをし、葉っぱ1枚1枚の葉脈の違い、大きさ、葉の形の違いなどを味わっていた。



これはどんな模様かな？

「秋」葉っぱ探検隊→落ち葉探検隊へ

1学期、「葉っぱ探検隊」になった子どもたちは、秋になると「落ち葉探検隊」になり、秋の色づく葉っぱの美しさや次第に葉っぱが変わっていくことに気づき、触れ合うことを楽しんでいった。



落ち葉のお布団
気持ちいい！おもしろい！

1枚1枚大切に集めた葉っぱを
使ってデザインを楽しむ。



<事例から言えること>

- ふるさとにある郡山西幼稚園は、様々な木々や草花に囲まれている。この自然と子どもたちは自ら関わり、発見したり、試したり、見つけたり、集めたり、調べ分かったり、と豊かな体験をしていった。ふるさとは、心豊かにするものがたくさんちりばめられている。子どもが見つけたものを、共に感じ寄り添い、価値あるものにしていくには、保育者の感性が大切であると思われた。
- 子どもは、モノとの出会いの中で心を響かせ、そのモノと真剣に向き合っていく。そこには、気づき、試行錯誤、新たな発見、疑問、挑戦など学びにつながるものがたくさんある。この心を響かせ向き合う過程に科学する心がある。ふるさとでの様々なモノとの出会いを大切にしたい。
- 一人の子どもの響き、心動かす感動体験は、友達に伝わり響いていく。また、響きを生み出す保育者の環境の構成によって、さらにたくさん子どもたちへと響いていく。響き合いが生まれる中で、子どもの科学する心は育まれていく。
- 子どもたちが葉っぱと向き合い、いろんなことに気づき心を響かせている姿に、保育者は心響かされていた。保育者は子どもの思いに寄り添うとともに、保育者自身の心の動きを表現しながら子どもと共に楽しんでいく。そこには、子どもだけの主体性があるのではなく、子どもの主体とともに、子どもに心動かされた保育者の主体性も存在する。子どもの響きは保育者の響きとなり共に響き合う共主体の中でこそ、科学する心は育つと考える。

2 コロナ禍 ふるさと 郡山城跡にふれて (5歳児) (令和3年5月~6月)

コロナ禍が続き、5月の春の遠足は、いつも園外保育で行く郡山城跡 (県の文化財) となった。そこで、いつもの「園外保育」ではなく、「遠足に行った」という経験を子どもたちに残したいと考えた。

いつもの郡山城跡を特別な郡山城跡に!

城跡には、天守台の展望施設や石垣、極楽橋などがある。いつもの郡山城跡を特別な郡山城跡にしたいとの願いから、職員で話し合う。

- A先生 「市内の他園では、コロナ禍なので遠足を園外保育に変更すると聞きました。でも、子どもたち (園長) に遠足に行ったという経験を残したいと思いますが、どうでしょう？」
- みんな 「それはいいですね」
- A先生 「では、郡山城跡の遠足を特別なものにするにはどうしたらいいかな？」
- F先生 「・・・カードを作るとかはどうでしょう」
- A先生 「カードつくる、いいね。他には？」
- E先生 「ビンゴにしてもいいのかも」
- C先生 「カードはいいと思います。ビンゴは年長にはいいけど、年中には難しいかな」
- D先生 「じゃあ、カードにオリエンテーリングみたいに課題を書いてクリアしていくのはどうでしょう」
- C先生 「極楽橋を渡るとか、天守台に登るとか」
- みんな 「それはいいですね」
- B先生 「地図を作って、その地図を見ながら、自分たちで進んでいく遠足っていうのも、連れて行ってもらう遠足ではなくなるしおもしろいね。あと、VR 郡山城っていうアプリがあるよ。このアプリを開いて、現地で石垣にスマホをかざすと郡山城の姿がよみがえるんです。」
- D先生 「それ、タブレットだと見やすいですね」

と楽しい話し合いが進み、「探検! 発見! カード」と郡山城跡絵図、VR 郡山城のアプリを用意することになる。

「探検! 発見! カード」を作成、郡山城跡絵図を用意

「探検! 発見! カード」の項目を「天守台に登ろう」「さかさ地蔵を見つけよう」「極楽橋を渡ろう」「鉄砲の覗き穴 (鉄砲狭間) を見つけよう」等、郡山城跡の文化遺産を活用したり、自然豊かな園で日頃興味をもっている虫、鳥、草花を見つけたりといったものにした。子どもたちがわくわくする様子を思い浮かべながら「探検! 発見! カード」を作成する。

鉄砲狭間については、市の考古学に詳しいY氏から説明を聞き、正しい情報を入手する。同時に、地域振興課より郡山城跡絵図もいただく。地図をたどりながら、子どもたちが主体的に遠足を楽しめるよう準備する。準備をしていく中で、鉄砲狭間の知識や石垣が作られた時の様子、なぜ、さかさ地蔵がそこにあるのか、など文化遺産郡山城跡の文化に保育者が触れることになり、歴史を感じそのおもしろさに心響かされていった。

イラストを手分けして描き、先生たちが協力してカードを作る。



郡山城跡案内絵図 (市地域振興課より)



以前に使ったことがあった B 先生が、再度現地に行きアプリ VR 郡山城を確かめる。しかし、石垣の上にピッタリと郡山城が現れず困っていたところ、地域振興課の方も心配し現地に来てくださる。教えていただいたおかげで映し出すことができる。極楽橋、さかさ地蔵など他のスポットでもアプリがきちんと作動することを確認し、他の先生たちに伝える。

5月17日(月) ふるさと郡山城址への遠足を楽しみに!

「探検!発見!カード」を見せて遠足の説明をする。「めっちゃおもしろそう!」「極楽橋ってどんなかな?」と様々な声が上がった。また「明日はこのタブレットも遠足に持って行って使うから楽しみにしててね。」と言う。子どもたちの心にわくわく感が広がり響きだした。

5月18日(火) いよいよ ふるさと郡山城址への遠足へ!

「自分たちの地域の文化に触れ、興味・関心をもってくれたら」「自分たちの地域の春の自然を感じながら遠足を楽しんでくれたら」「カードや VR 郡山城など使い、特別な遠足としてふるさと郡山城跡に親しんでくれたら」という願いのもと、遠足に出かける。

地図を見ながら郡山城跡を主体的に探検し、天守台に登ったり、散策したりして楽しむ。

今いるの、ここ!

3つ目もクリア



次はどっちに行く?

友達と心響かせながら!

心に響く体験に!

<VR郡山城を見てふるさとのお城のすごさを感じる>

天守台周辺や極楽橋付近で子どもたちが楽しみにしていたアプリを起動させ、当時の様子を再現したものを見る。



「めっちゃ大きいお城や!」「すごいすごい!!」「かっこいいなあ」「石垣は今あるのと同じや」①「石垣は、ずっと今まで残ってきたんだね」など、浮かび上がった郡山城の姿に心響かせる。

極楽橋は最近工事され、再現されているため「極楽橋は、今と一緒にや」「昔の橋が今もあるの?この橋がそう?」①「工事して昔と同じものが新しく作られてんよ」など実際の橋と VR の画像を見て、比べながら疑問に思ったことや感じたことをつぶやいていた。

どうなっているんだろう?

<石垣ってすごい>



ずっと昔からある石垣やねんな



「石垣の石、大きいなあ」「間に小さいのも埋めてある」「たくさん石積んだんやなあ」と、自分の手でどんな具合に積んでいるのか確かめている。

また、天守台の上には、ガラス張りになり、石垣の上を見ることができるところもあり、興味津々で見ている子どもたちもいた。

大きな石を積んでできた石垣を見て、偉大さやすごさ、昔の人がこんなにすごいものを作ったんだなど、実際に目で見たり手で触れたりして、体感していると思われた。

<さかさ地藏>



石垣の一部に「さかさ地藏」というものがある。「発見！探検！カード」にも入れており、説明を書いた写真付きの立て札を見た子どもたちは、地藏のある穴をのぞき込む。先生から「昔、豊臣秀長というお殿様が城を建てようとした時、石垣の石が足りなくて、石という石を集めて来い！と言って石垣を作ったところ、お地藏さんまで石として集められたということを知ると、興味深く耳を傾けていた。市の考古学に詳しいYさんに、郡山城跡をガイドしてもらい、いろいろな話を聞かせていただく機会を計画中である。

<鉄砲狭間>



敵を見付け、鉄砲を撃つための壁穴、鉄砲狭間を見つけた子どもたち。「ああ、これや！」「見つけた！」と駆け寄り、のぞき込む。「電車見えた」「町が見えた」「城ホールや」「図書館や」と嬉しそうに街並みを見ている。そこへ「鉄砲はどこ？」と口々に言います子どもたち。「え、ないの？」とあまりのがっかりした様子に、保育者は、鉄砲がうてると思っていたのだと、思わず笑ってしまう。

<赤い実、発見！>



「探検！発見！カード」には、子どもたちの好きな草花や鳥、虫を見つめるミッションも組み込まれている。子どもたちは「これ何という花かな？」と園にない草花も見つけていた。その中で、N児、H児、K児たちが「こんなん見つけた！」と赤い実を見つけてきた。「写真撮って」と子どもたち。後日、写真を見ながら図鑑で調べ、「ヘビイチゴやな」と納得し、クラスみんなが見つけたり発見したりしたものを貼っていく「何でも発見ボード」に貼っていた。

ふるさとの文化遺産などに五感を通して触れた子どもたち。日常の園外保育の場所が特別な“遠足”の場となり、心に響く体験となった。また、先人がつくりあげたものと私たちは隣り合わせて生活していることを改めて感じた保育者たちだった。それを感じたうえで、子どもたちと共に触れ合っていきたいと思った。

響き、広がるドキュメンテーション

遠足後、城跡や極楽橋の写真、遠足当日の子どもたちの姿を写したドキュメンテーションを作成する。ドキュメンテーションを掲示することで、子どもたち同士で自分たちの経験を振り返ったり、その時発見したことなどを伝え合ったりする姿が生まれた。

また、子どもだけでなく、降園時に保護者にも見ていただけるよう掲示した。すると、親子で写真を見て会話を弾ませたり、遠足で発見したことを嬉しそうに保護者に伝えたりする様子が見られた。子どもたちの楽しかった遠足の体験が保護者にも伝わり、保護者も楽しい気持ちになり、「遠足、楽しかったんですね」「色々教えてくださいました」「ミッションをクリアしたカードを嬉しそうに見せてくれました」などの声をいただくことができた。子どもたちの楽しい！が保護者にも響いたのだと感じることができた。

子ども同士の響き合い、そして保護者への響きも生まれた。



<保護者に響く> ～保護者Oさんより～

昨年の秋とほぼ同じコースだったにもかかわらず、ものすごく喜んで帰ってきました。「発見！探検！カード」が大ヒットだったようです。「さかさ地蔵」とか、カードに文字となって残っているので、家でも「☆」の印、つけてもらったカードを見返しながらか、「ここ行ってなあ、次はここ行ってなあ」としっかり名称を言いながら教えてくれました。はじめ、親目線では、またここか、コロナだし仕方ないか、という風に思っていました、子どもにとっては、同じ場所に足を運ぶことで、物知りメーターが上がっているように感じましたし、カードをもらってゲーム感覚でまわることもものすごく喜んでいましたので、すごくいい経験をさせていただいたなあと思いました。ありがとうございました。(今度、娘が「鉄砲ののぞき穴」まで案内してくれるそうです！)

響いたことを絵に表現する

翌日、みんなで絵を描くと天守台の石垣や極楽橋を描く姿が見られた。心に響いたことを思い思いに描いていた。



響いたことを生かして遊ぶ

城や石垣が描かれている絵本「にんじゃつばめ丸」(文：市川真由美・絵：山本孝 ブロンズ新社)を読む。実際の石垣、VR で見た城、絵本で描かれている石垣や城など経験と映像があいまって、遊びの中で積み木や巧技台を使って城や石垣を構成し、忍者になる遊びが生まれた。



積み木で作った鉄砲狭間

積み木をどう組み合わせると鉄砲ののぞき穴になる？

お城を作りたい！

子どもたちから「お城を作りたい」という声があがったので製作をする。ことにした。作りながら「どうなったのかな？」というので、VRの天守閣の画像を見せると、「5階建てやってんな」「屋根もいっぱいついてる」「金ピカもついてる」と前回より細部に興味をもって見ていた。また、保育者が図書館で借りてきたお城の図鑑も興味をもって見ていた。イメージが鮮明になり、思い思いの城を製作することができた。遠足で見えたこと、VRの画像、絵本や図鑑などの要素が絡み合い、子どもたちの作りたい気持ちやイメージがさらに膨らんだと感じた。ふるさと郡山城跡の遠足で体験した世界がクラスの壁に広がった。



<事例から言えること>

- コロナ禍であるが、驚きや発見をたくさん得た今回の遠足は、子どもたちにとって“特別な遠足”となった。職員でアイデアを出し合いながら協力して保育することは、子どもたちの育ちを最大限に引き出すことに繋がるものであると感じた。そこには、保育者同士の響き合いが生まれていた。「F先生イラスト描くの得意ですね!」「カードのアイデアいいですね」「郡山城跡案内絵図子どもたち喜ぶと思います!」と保育者同士の響き合いの中で生まれた環境の構成は、子どもたちにおもしろい!楽しい!と響いていったと思われる。また、子どもたちの楽しかった!という響きは、保護者にも伝わり、保護者の心にも響きが伝播していった。「響育」は、子どもも保護者も保育者も響き合う中で育まれる。
- “特別な遠足”は、地域の文化・自然に親しみを感じ、子どもたちが、ふるさとを感じることに繋がった。歴史をつかってきた先人たちの文化を肌で感じることは、「郷育」であるとともに、そこで、どうなっているんだろう?すごいなあ、こうなっているんだ、などと考えを巡らし、知識を得て、学んでいく過程に「郷育」があると思われた。市役所の考古学に詳しいYさんにガイドをしていただく計画をしているが、さらに「郷育」を深めていくことに繋がるものだと楽しみにしている。
- このような「響育」「郷育」で育む中に、子どもの心がおのずと揺さぶられ、科学する心が育まれていると考える。

3 すみれ探検隊とふるさとの自然（5歳児すみれ組）（令和3年4月～7月）

① 『すみれ探検図鑑』

年長になった子どもたち。すみれ組では、4月、タンポポやカラスノエンドウ、ハルジオンなど、子どもたちの摘んだ草花が毎日保育室に集まってきた。

4月上旬 気づきが生まれる保育環境

園庭や中庭、登園途中など、様々な草花を見つけ、摘んでくる子どもたち。「飾りたい!」という言葉とともに、子どもたちの草花が好きという気持ちを受け止めたいと、飾る場所を作った。摘んできたものを飾ることで、友達の見つけたものに触れる機会となり、「誰がとってきたの?」「これ、ぼくも知ってる」「見て、お花の真ん中につぶつぶがあるよ」と友達と見合いっこしていた。また、自分の摘んできたものを飾ってもらう喜びも味わうことができた。自分の見つけたものを大切にしてもらえると感じることは、子どもの育ちの土台になると思われる。

さらに、種類別に容器に入れたり、見えやすいように画用紙の上に並べたりし、気づきが生まれる保育環境を作った。



4月下旬 名前は何かな?調べてみよう

部屋に置いてあった図鑑をよく見ている子どもたち。草花に大変興味をもっているため、草花の図鑑をよく調べられるようにと置いておくと、友達と一緒に広げ調べる姿が見られた。また、虫も好きで、虫の図鑑も見て調べるようになる。自分の見つけた草花や虫を図鑑で見つけるととても嬉しいし、名前が分かることでおもしろくなり、もっと知りたくなる。先生や友達にも知らせたい気持ちが膨らみ、伝え合うことを喜んだ。

保育者は、発見したことや見つけたものを後から見るができるよう、写真に撮って印刷し、子どもがいつでも見られるようにした。

この花と同じの全然ないなあ・・・違う図鑑でも調べてみよう。

- ・見つけた草花や生き物の写真
- ・のり
- ・図鑑
- ・細かいところも描けるような細いペン
- ・画用紙
- ・あいうえお表
- などを用意



飾ることで響き合う

子どもたちは、図鑑で調べた名前を紙に書いていく。それに加え、保育者も子どもたちが気付いていたことやつぶやきを書き加えていく。

保育者は、書いたものを飾ったり、貼ったりし、みんなが触れることができる環境を作った。すると、その紙を手にし、園庭や中庭に出かけ、友達が調べた花と一緒に花を探す姿が見られた。調べたこと、見つけた喜び、花や草、生き物が好き、おもしろいなど、いろいろな気持ちが響き合っていく。

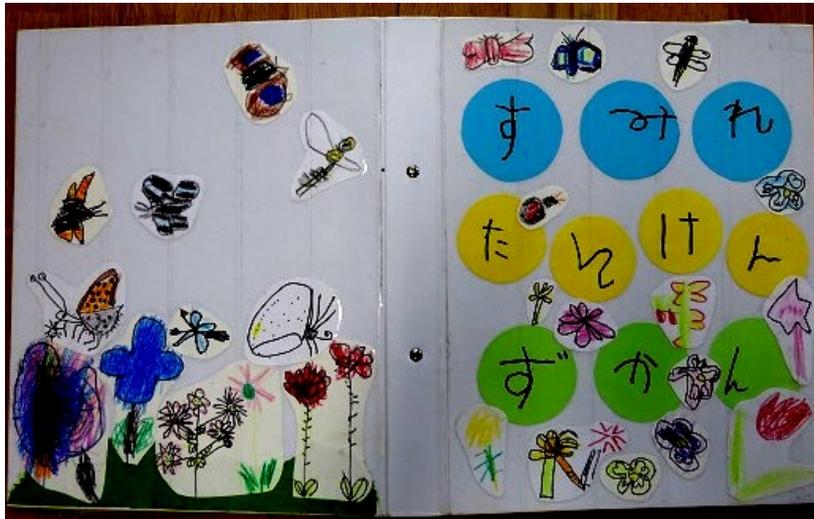


実際のものがあるときは、共に飾っておくことで、よりそのものを感じ、知ることができる。



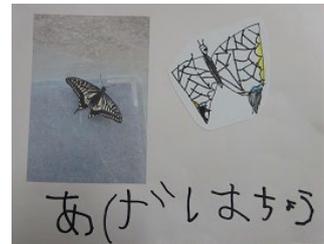
5月上旬 『すみれ探検図鑑』の始まり

子どもたちが見つけた草花や虫の写真はボードをうめつくす。そこで「どうしよう？」と子どもたちに相談した。「他の壁に貼ろう」「でもまたいっぱいになるやん」「はがして新しいの貼っていったら？」①「せっかくいい発見してるから、先生はしまっておくのはもったいないと思うねん」・・・悩んでいた時、G児「そうや、本みたいに重ねていったらいいねん！」とひらめく。友達から「いいやん」「すみれ図鑑や」と声があがる。①「みんな見てる図鑑みたいやね」。そして、響きがたくさん詰まった『すみれ探検図鑑』作りが始まる。



「描きたい」から生まれる観察眼

図鑑作りの話をしていた時、子どもたちが、調べたものを「描きたい」と言い出す。見つけた草花や虫の写真と紙やペンなど一緒に用意すると、絵を描き始める子どもたち。描き方はそれぞれで、実際のものを見ながら描く子、図鑑を見て描く子、見つけた草花や虫を見て描く子など、それぞれであった。細かい模様や微妙な色をよく見て書き表そうとしている。もっと描きたい、もっと描きたいと、描いていく子どもたち。あまりに細かくきれいに描いていたので保育者は「みんな、すごい！こんなによく描けたね！」とびっくりする。描きたい気持ちが強く熱中していく子どもたち。細かく描写する姿から、描くことで、よく見ようとし、そのものの特徴や他のものとの違いを捉え、“物事をよく見ようとする目”（観察眼）が響き合っている。



5月下旬～7月 『すみれ探検隊コーナー』誕生！

その後、すみれ組の子どもたちは、その名も“すみれ探検隊”となって園内・地域へと出かけていった。いつでも調べられ、描ける場所をと、保育者は『すみれ探検隊コーナー』を保育室の一角に作る。

子どもたちが入れ替わり立ち代わりやってきて、一人で黙々と研究したり、友達と一緒に調べたり描いたりする、響き合いのコーナーが誕生する。

- 用紙したもの
- ・すみれたんけん図鑑
 - ・子どもたち愛用の様々な種類の図鑑
 - ・虫めがね
 - ・ペンやのり
 - ・椅子
 - ・紙



H君が見つけたアオスジアゲハだ。めっちゃきれい！

オクラの花咲いてるか見てこよう

これ昨日一緒に見つけたね。友達と見つけたものを再確認する。



② チョウと出会い、響き合う

子どもたちが出会った、たくさんのチョウたち

虫が大好きなすみれ探検隊。特に夢中になったのが、チョウを捕まえることだった。始めは苦戦していたが、毎日捕まえているうちに網の動かし方が変わり、左右に素早く振りながら捕まえるなどいい方法を見つけていくようになった。また、チョウのことを思い、羽を傷つけないような持ち方を考えていく。

捕まえるたびに、名前を調べ、羽の形や模様、色や様子など観察する。好きなものへの探究心はどんどん膨らむ。子どもたちのチョウへの響きは保育者にも響き、保育者もチョウに詳しくなっていく。すみれ探検隊のチョウへの思いは熱い。

『出会ったチョウ達』



ベニジミ



モンシロチョウ



クロアゲハ



キアゲハ



アオスジアゲハ



ジャノメチョウ



ミスジチョウ



ツマグロヒョウモン

など

製作に表れたすみれ探検隊の“観察眼”

たくさんの草花やチョウと出会い、草花やチョウのことを知った子どもたち。五感を通して触れ合う中で、思いやる気持ち、大切にしようとする気持ち、知る喜び、分かる楽しさ、伝え合い響き合う心地よさなど、心の豊かさを得ていった。

子どもたちの好きになったチョウや花を製作すると、本物そっくりに作ろうと一生懸命になる姿が見られた。子どもは、“作る”ことで、知ったこと、感じたことなどの自分で得た知識を再確認しながら表現し、心の中にさらにため込み積み重ねていく。

すみれ探検隊が愛するチョウへの観察眼の鋭さは、製作にも表れる。



モンシロチョウは、黒い模様がある

足もあって頭に触覚も生えている



本物そっくりに作りたい



小さな点があった

アゲハチョウの模様を作るのは難しいなあ。でも作りたい。

チョウは、僕たち、私たちの大切ななかま

チョウの幼虫を見つけることも多く、クラスで飼育し、『幼虫→さなぎ→成虫』への進化を何度も見る事ができた。自分たちで捕まえてきた幼虫がチョウになることは、子どもたちにとって大きな喜びや感動であった。しかし、幼虫のまま死んでしまうこともあり、“死ぬ”ということを目の当たりにして悲しむ姿もあった。「もっと葉っぱを入れてあげたらよかった」「逃がしてあげた方がよかった」など、死なないためにはどうしたらいいかということ子どもと共に考えた。生き物の“命”を感じ、大切にしたい気持ちにつながった。

毎日、飼育ケースをよく見るのが日課になり、成長に敏感に気付き、知らせ合う。チョウは子どもたちにとってクラスの一員となり、大切な愛おしい存在となった。

6月25日（金）“キアゲハ”との出会い

園周辺の地域の自然とも触れ合えるように、散歩に出かけていたところ、J児のおじいちゃんの田んぼに行かせてもらえることになり、みんなで出かける。「Jくんのおじいちゃんのおかげやなあ」と大喜びの子どもたち。

畔を壊さないように注意を払って行かせてもらう。そこで、思い思いに生き物を見つけ楽しむ。カエル、オタマジャクシ、カブトエビ、アメンボ、ヤゴなどを見つけ、ひとしきり大盛り上がりする。「ここもおじいちゃんのところやから、入ってもいいで」とJ児が言ってくれたので、隣の草むらにも足を延ばしだした。草をかきわけ、草むらに入り散策するすみれ探検隊。草に抵抗をもっている子もいるかもしれないが、みんなと一緒にすみれ探検隊なら、草むらにみんな入っていける。このたくましさや心の豊かさはふるさとで育まれていくと感じた。

突然、K児が「幼虫見つけた！」声をあげる。見ると黄緑と黒の模様にオレンジの点がついた幼虫が2匹。しかもとても大きい。「すごい見つけたね」みんなで大喜びし、持って帰った。

早速、図鑑で調べる子どもたち。そしてキアゲハの幼虫ということが分かる。

K児は見つけた幼虫がかわいくて仕方がない。一緒に触れ合いたい気持ちから弁当もあつという間に食べて、帰る間際までずっと「かわいいなあ」「めっちゃかわいいわ」と言いながら、幼虫と触れ合う。その気持ちに響いた友達がたくさん来て一緒に触れ合います。するとちょうど、幼虫がうんちを出す。「おお、うんち！」「ここがお尻やな」と、じっと見つめる。保育者は、幼虫が弱りはしないかと冷や冷やしながらも、こんなにかわいいと思っている子どもの姿を見守ることにした。

K児は、見つけた喜びから「同じのが2匹いるから、1匹は幼稚園でみんなと飼って、1匹は持って帰りたい」と言う。保育者は、どうしようかと思ったが、K児の思いに心響かされ、その思いを受け止めることにした。

「何を食べるのだろう？」と疑問をもったが、降園時間が迫っており、調べる余裕がなくなりました。子どもたちと一緒に調べたり、食べさせてみたりしたかったが、この日は金曜日だった。



動いてる！かわいい〜



① 園に残った幼虫、そして保育者の心の響き

2日間の休みの間に幼虫を死なせるわけにいかない。降園後、園に残った幼虫を前に、保育者は「そうだ！」とJ児のおじいちゃんの田んぼに行き、幼虫がついていた葉っぱを取って与えた。しばらくしても食べる気配がない。保育者は幼虫が心配になり、家に持って帰ることにした。

困った保育者は、スマホで検索し、パセリを食べることを知る。しかもスーパーで売っているパセリではだめで、植わっているパセリでないといけならしい。植わっているパセリを探すしかない。翌日の土曜日、園芸センターにあることが分かったため、少し遠いが買いに行く。パセリを手に入れた保育者は、家に帰り、幼虫にパセリを与えると、すごい勢いで食べ始めた。それを見た瞬間、「こんなにお腹すいてたの、ごめんね」と思いがあふれ、パセリをおいしそうに食べた嬉しさと同時に幼虫に対する愛おしさが心の中に広がった。

保育者は、それまで幼虫の動きが気持ち悪く、触ることができなかった。しかし、この瞬間、K児をはじめとする子どもたちの「かわいい」「かわいいなあ」の言葉が身に沁み、初めて触ることができた。

また、パセリを食べているところを思わず動画で録画し、月曜日、このことを子どもたちに伝えたいと思った。月曜日、わくわくしながら子どもたちと一緒に動画を見る。子どもたちは、「うわあ、食べてる！」「すごいなあ」「おいしそうに食べてるな」と、感動の音が響く。録画を見て、パセリをあげたいとあげる子もいたが、幼虫は、あまり動かなくなっており、パセリを食べなかった。その後、さなぎになる。

② 持ち帰ったK児宅で、母親への響き

K児は、母親と共に同じセリ科のセロリを買ってきて幼虫に与える。母がK児の気持ちを受け止め、寄り添ってくださったことで、幼虫は、元気に土日を過ごすことができた。すると、みんなと一緒に幼虫を見たいというY児の気持ちが膨らみ、月曜日、幼虫を園に持ってきた。

虫はもともと嫌いで飼うなんて考えられなかった母。子どもが、虫が好きなので、その気持ちを受け止めたいと家でも飼育するようになったという。「Kが、生き物が好きなので、一緒に世話をしています。でも触れません。」と、母。K児の幼虫への思いが母親に響き、響き合いの中で、幼虫を大切に飼育してくださった。

大変！幼虫が落ちてる！

ケースに入れたパセリの茎で縮こまり動かなくさなぎになった幼虫は、翌日ケースの蓋にぶら下がっていた。さなぎになるところは見ることができなかった。みんな様子を見ては、「いつチョウになるかな？」と楽しみにしていた。よく見たくて蓋をそっと開けては見ている子もいた。

ところが1週間後、「大変！幼虫が落ちてる！」と幼虫が2匹とも下に落ちているのを見つける。何かの弾みで落ちてしまったようだ。「ぶら下がっていないとうまくチョウになられへん」「死んでしまったらどうしよう」「大丈夫かな」と心配する子どもたち。降園時間が迫っており、子どもたちはそのまま帰宅となる。残された保育者が、こういう場合どうすればよいのか調べる。布を立てかけたところに沿ってさなぎを立てかけるとよいということが分かり、そのようにする。翌日、朝早く登園し「幼虫大丈夫かな」と観察ケースを除いたL児はそれを見つけ「これ何？」と聞く。保育者は、昨日のいきさつをM児に説明する。その後、登園してきたみんなを集め、昨日の降園後、調べたことを話す。①「動かしたら生まれないかもしれないんだって」と保育者が言うと、「じゃあ、触らないでおこう」「見るだけにしたらいい」「そーっと見よう」と子どもたち。そして「生まれて欲しいから見るだけにしよう」ということになった。

7月8日(木) “今日がキアゲハのお誕生日”

約2週間後、朝一番に登園した虫好きのL児が「キアゲハになってる！」と発見する。2匹のうち、1匹がチョウになっている。L児が登園してくる友達に次々と伝えていくと「え、どれ?」「ほんとうや。キアゲハになってる!」そしてまた一緒に次の子に「なあ、なあ、キアゲハ生まれてる!」と、どんどん伝え合い、感動が響き伝わっていく。「チョウになったな」「今日がお誕生日や」と自分たちと同じように感じ、つぶやく。K児も自分の目で確かめ「きれいなキアゲハ生まれた。かわいい!」と、笑顔いっぱいになる。

「まだ、羽やわらかいからそっとおいといてあげやんな」ということでお帰りまでそっと置いておくことにする。「もう1匹はいつ生まれるかな」

「みんなで見ような」と言い、いろいろな子が時々観察ケースを見、確かめていたが、弁当前にチョウになっていた。「生まれてる」「今生まれたんや」「2匹チョウになった」

「一緒のお誕生日やな」と喜び合う。嬉しくてたまらないK児は「幼稚園のみんなにお知らせに行こう」と提案し、他のクラス、学年、職員室にお知らせに行く。

弁当後、2匹はパタパタと羽を広げていたため、「飛びたがってるのどちがう?」「羽、大丈夫そうやで」「そろそろ逃がしてあげよう」ということになる。

ケースのふたをあけると、ヒラヒラヨロヨロと飛び出す2匹のチョウに「飛べた!」「元気でね」と見送る。



<事例から言えること>

- 子どもたちは、五感を使って、見たり触れたり感じたりしている。自分の感じとったものを絵に描いたり、製作をしたりする時、子どもたちは、本物と同じように描きたい、本物のように作りたいと、じっとそのものを見つめ、形を表そうとする姿が見られた。自分の目でよく見る、自分の手で描く、自分の力で製作するといったアナログの生活の中には、科学する心を育むものがたくさん含まれている。自分の目や手で確かめる、図鑑をめくって調べる、友達と共に話し合うなどの、子どもが自分の体や頭を駆使して取り組む姿を大切にしたい。
- 子どもは、見つけた草花や虫が大好きになると、大切にしようとした。草花一つ一つを大切に集め、自分たちが作った図鑑を世界にひとつと大切にし、幼虫に心を寄せ「かわいいなあ」「かわいいなあ」と何度もつぶやき「生まれて欲しいから見るだけにしよう」と決めるなど、子どもにとってかけがえのないものへの気持ちが膨らんでいった。子どもの思いを大切に、子どもの気持ちを愛おしいと思える保育者がいることで、子どもは出会ったヒト・モノ・コトを大切に思えるようになっていくと考える。
- 子どもは、学ぼうと思って学んではいけない。子どもの楽しい、好きといった気持ちは、子どもの学びの源である。子どもの心が動き、興味や好奇心をもって身近なヒト・モノ・コトに関わり、自分で確かめたり、試行錯誤したり、考えたりなど心と体全体で周囲と関わっていく遊びの中に、おのずと学びが存在する。子どもの楽しい、好きという響きを生み出していく環境を構成することが保育者に求められている。
- 子どもの小さな響きは、保育者の受け止めや環境の構成によって、大きい響きとなる。また、友達や先生、保護者へと響き合いが広がっていく。共に響くことで、新たな響き・響き合いが生まれ、響き合いの連鎖・連動・往還を生んだ。これが科学する心を育むこととなる。

V つながり 響き合う ドキュメンテーション

<子どもと作る ドキュメンテーション>



ここに載ってます！読むよ！



ハランキョウの実、パチンと跳ねるコメツキムシ、カタツムリには種類がある・・・すずらん組の“すずらん研究所”には、郡山西幼稚園の園庭で見つけた素敵なお宝がいっぱい！！

分からないことは“すずらん研究所”に聞きに行こう！

こんな発見がありました。これは何ですか？

昨年度の“すずらん研究所”の取り組みが、今年度の実践につながっている。子どもと子どもが織りなす遊びが広がり深まっていく。「響育」は年度から年度へとつながっていく。

<子ども・保護者に響くドキュメンテーション>



このようなドキュメンテーションは人と人をつなげ、響きを生み出す架け橋となっている。

VI 研究を振り返って

○ 子どもが過ごすふるさとは、宝がいっぱい

新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るっている。子どもたちは、例年とは違う幼稚園生活を余儀なくされている。しかし、子どもたちの育ちには、心動かす毎日が大切であると考えます。職員で子どもたちに豊かな経験をとった時、私たちの住むふるさとは、豊かな自然や文化があることに気付かされた。

ふるさとは子どもたちにとって、宝となるものがたくさんちりばめられている。子どもと共に心を動かし、たくさんの宝に出会いながら、心弾む毎日を送る中で、科学する心を育てていきたい。

○ 始まりは小さなことから

子どもの小さな気付きにはキラリと光るものがある。保育者が小さな心の動きを見逃さず、寄り添い、共に感じていくことで、響きが生まれた。小さな響きは、周りの友達、保育者、保護者などと互いに連鎖・連動・往還しながら大きな響き合いとなっていく。すべては、子どもの小さな響きを大切にすることから始まる。

○ ふるさとでの響きは、オンリーワン

ふるさは、他にはないその地ならではのヒト・モノ・コトがある。自然に恵まれ木々に囲まれた園庭での遊び、散歩に行く田畑での発見、そこに住む人（友達、保育者、保護者、地域の人など）との出会い、郡山城跡をはじめとする文化との触れ合いなど、ふるさとでのヒト・モノ・コトとの出会いは、その地域のオンリーワンな響きを生み出した。郡山西幼稚園だからこそ、響いたことがたくさんあった。ふるさとでの毎日の営み一つ一つを大切に、科学する心を育てていきたい。

○ ふるさとの営みを見つめる

コロナ禍で、私たちのふるさとを見つめなおした時、ふるさとは豊かな文化が流れていた。ふるさとは、先人の営んできた歴史がある。歴史に育まれてきた城下町の街並み、城跡をはじめ、郡山西幼稚園にも歴史がある。広い園庭と八角形の園舎には、教育を大切にしてきた大和郡山市の営みがある。子どもたちが鳥や金魚を見ている園の裏手の金魚池には、金魚を産業としてきた大和郡山市の文化がある。このような歴史の営みがあって今があることを、今回、再認識することができた。近くにある金魚博物館、小学校に来校されている金魚博士、市役所の考古学に詳しい職員など、まだまだふるさとの文化に触れる機会はある。子どもたちとふるさとを感じる経験に心を躍らせていきたい。

○ 実態顕微鏡と単眼鏡

今年度、市が募集しているアイデアサポート事業に「西幼 何でも発見隊」の学びの芽を育てる”をテーマに応募したところ、審査に受かり、実態顕微鏡と単眼鏡を買っていただけることになった。子どもたちが心響かせ出会う日を思うと、楽しみで仕方ない。子どもたちが、どのように興味をもち活かしていくのか、保育者も共に楽しんでいきたい。科学する心は、更に深まると思われる。

○ 質の高い保育者集団をめざして

本園の保育者たちは、遠足に向けての話し合い、日々の保育カンファレンス、園内研修など、自分の思いや考えを出し合ったり、分からないことがあれば聞き合ったりし、前向きである。保育や子どものことについて真剣に考え、語り合うことができる保育者集団である。まだまだ未熟な点もたくさんあるが、今後も子どもたちと真剣に向き合い、互いに高め合っていける保育者集団でいたいと思う。

改めて「郷育」を見つめ、地域・子ども・保育者・保護者が織りなす「響育」から「科学する心」を大切に育みたい。

研究に携わった本園の職員 木下 育子（園長） 大内 菜恵子（研究代表） 塩田 菜南子 浦尾 愛実
増井 那美 木村 ななか 小池 知子 勝山 恵美 開キ 弘子 竹井 宏枝
令和2年度職員 瀬川 文代（園長） 山本 奈央 藤川 美樹 西畑 智絵